

## 引用文献

- 1) 八杉龍一編 "ソヴェートの科学" 日本評論社 1948.
- 2) John Turkevich, Chemical and Industrial News, 30, 2792 (1952)  
邦訳 菅考男, "ソヴェートの物理学および化学" 科学 Vol. 24, No. 8, pp. 423~427, 1954. 岩波書店.
- 3) Sovetskii Bol'shoi Entsiklopediia, Moskva (ソヴェート大百科辞典)
- 4) Geograficheskii Atlas dlia 7-go ; 8-go klassov srednei shkoly SSSR, Glavnoe upravlenie geogezi i kartografii MVD SSSR, Moskva, 1954.  
(USSR 中学校 7~8 年用地理学地図, 測量作図中央局, モスクワ, 1954 年)  
(気象研究所)

## 『ソヴェート科学アカデミー報告. 地球物理学編』

9月~10月号 第五卷 1954 内容紹介

## 《表題とアブストラク》

- 5.1 pp. 385~389  
E.N. Liustikh

“Skhemy anomalii sily tiazhesti dlia vsei zemli”

“全地球の重力の異常分布図”

ブーゲとファアヤの補正せる異常図を示し, その説明となる疑問をしらべる.

- 5.2 pp. 390~410  
M.V. Gzovskii

“Tektonicheskie polia napriazhenii”

“地殻のストレス場”

地殻の裂け目を説明し予報する方法を進めるのにソヴェート科学アカデミー地球物理学研究所で研究している一般の傾向がのべられている. 地殻のストレス場についての表示をして, 決定することがのべられる. 固有のストレス場を復元する地質学的方法が簡単に調らべられ, 地殻問題を解くのに地殻のストレス場の復元を利用する例が述べられる. この論文は 1953 年 3 月 18 日に, ソヴェート科学アカデミー地球物理学研究所学会で著者が報告したのを拡充したものである.

§ 1. 地殻のストレス場. § 2. 地殻のストレス場を調らべる地質学的方法. § 3. 地殻のストレス場の復元の例.

- 5.3 pp. 411~414

G.I. Gurevich

“K voprosu o mekhanizme razdeleniia plastov gornykh porod na bloki”

“地塊上の鉱脈を分離するメカニズムについて”

板状物質の二層間に押されている個々の厚板に裂目の生ずる条件となる基礎要素がのべられる.

- 5.4 pp. 415~423

A.G. Kalashnikov

“Opredelenie magnitnoi vospriimchivosti gornykh porod v polevykh usloviakh”

“野外で鉱脈の磁气的感受性をきめること”

低周波の可変磁場で動き, 野外でも実験室でも使える



南方定点で写したフロント写真(24頁の説明参照)

鉦脈の感磁性を測定することの出来るマグネットメーターをのべる。この器械の感度は  $1.10^{-6}$  CGSM, 精度は約5%である。

5.5 pp. 424~442

I.S. Berzon

“O mnogokpatnykh prelomlennykh volnakh v vertikalno-sloistykh sredakh”

“垂直方向には層状をなせる媒質中を多重屈折する波について”

屈折層を多重に反射・屈折してゆく波の特質をしらべる。多重波の力学的特質のホドグラフと質的研究の解析をもととして、相関と地震記録との識別についてしらべられる。

§ 1. 屈折層で垂直に限界のある多重波の存在域とホドグラフ。§ 2. 屈折層で垂直に限界のある多重波の相関の特質について。§ 3. 垂直的多重層の媒質。§ 4. 垂直層における多重波の識別。§. 結論。

5.6 pp. 443~450

V.V. Belousov, G. P. Gorshkov, B. A. Petrushevskii

“Po povodu stati I.E. Gubina «O seismicheskom raionirovanii iugo-zapadnoi Turkmenii»

“I.E. Gulin の《南西トルクメンの地震地区に関して》の論文に就いて”

I.E. Gulin の地震地区の研究についてのべた後に調査してみる。この発表は与えられた問題に従う同著者の上記の考慮とは関係が少いことが確かめられるしこの新しい地震構造の“方法”はのべてはならないことを示

す。

5.7 pp. 451~480

V.V. Shuleikin

“Dinamika vetrovykh veln i mertvoi zvybi”

“風浪とウネリの力学”

波長 10 m, 波高 1 m の風浪を風速 19 m/sec まで出しうる暴風槽——極めて大きな直径の円形水槽で風浪とウネリをしらべる新しい実験方法をのべる。波の出来初め、発達と風を止めた後の波の消滅は光学的方法でテープに自記される。波の発達、消滅或は水深を浅くすることによる崩壊を種々の場面で映画撮影される。波の各場合についてのエネルギーが計算せられる。風のエネルギーによる波の持続は、今までの諸説が不満足であることを明らかにさせる。水の分子エネルギーの増加を内部構造の解析より風の作用で生長する理論を考える。理論計算が実験とよく一致する。風速が極めて大きいときに観測される相異は理論で説明される。初め風による波長の増加が考えられ、これが解決される。同じくウネリの起りについての問題がとかれる。風を止めた後に計算した波長とこれについての法則性は自然で観測せられた結果とよく合っている。向い風で、ウネリの模様についての問題が考えられて解かれる。ウネリをなくする法則と完全消滅に必要な時間値が考えられる。ウネリが完全になくなるまで波長は一定としておく。又風の方向が変転した場合にどうなるかを明らかにする。

これらの結論は任意方向の風について一般化される。波長が増したり消滅する速さと、一定したウネリの波長

(17 頁え)



撮影者 定点観測部 金水 和夫